

戊○萬治十一月廿八日
元年

〔享保集成絲綸錄 三十七〕寛文九酉年正月

一帳はづれ之酒屋、來月朔日より、與力同心指遣相改之、若酒少成とも致所持候ハ、酒道具とも
に取上、其身ハ曲事可申付候、勿論請酒も帳はづれ之者共ハ、向後商賣無用たるべし、右之日限前
に、酒不殘賣拂可申者也、

正月

寛文十一亥年十二月

一町中ニ而五味酒并白酒ねり酒造り商賣仕候儀、御法度被仰付候間、左様相心得、自今以後堅造
申間敷候、尤只今迄造り來ル者誰々と書付、樽屋所江持參可申候、右之酒屋無之町々も、月行事印
判持可參候、

十二月

〔御當家令條 三十二〕覺

一諸國在々所々ニ而當年寒造之酒米員數之儀、去年之半分可造之、若令違背多造之族有之ば、縦
後日ニ露顯たりといふとも、可爲曲事之條、訴人ニ出べし、急度御褒美可被下之、違犯之輩は勿
論、其名主五人粗迄可被行罪科、來年二月ハ右酒商賣可仕、其以前は一切賣べからざる者也、

申○延寶 九月

覺

一當年寒造酒之儀、最前如相觸彌守其趣、寒造之外當坐作新酒之儀、當年來年爲停止之間、一切造
間敷候、若相背もの於有之は、急度可申出之、御褒美可被下之、自然作者有之を隱置、脇ハ知れ候
ハ、當人は不及申、其所之名主五人組、可被行罪料者也、